

---

## 急性期閉塞性脳血管障害の検討

高橋 一浩、 島 英倫那、 三間 洋平、 渡部 琢治、 新井 基弘  
(社会医療法人祐生会 みどりが丘病院 脳卒中センター)

---

脳梗塞に代表される脳卒中は早急な対応が必要とされる。なかでも、突然かつ重篤な神経症をきたし、放置すれば重大な後遺症を残すのは、主に心臓内からの血栓が脳の主幹動脈を閉塞させる脳塞栓である。当院でも、高齢化に伴う心房細動患者の増加につれ、脳塞栓症の搬送患者が増えている。救急や脳卒中センターでの治療の第一選択は t-PA の静注であるが、時間的制約のほか、全身状態や血液検査をはじめとする禁忌事項がある。結果として、全例で治療が奏功し閉塞血管が再開通するわけではない。そこで、血栓を血管内から回収する治療が導入された。超急性期の血栓回収療法の有効性が明らかとなり、ガイドラインにも明記されている。

脳梗塞は発症から治療までの時間経過によって患者の予後が劇的に変わる。迅速な再開通により、脳が不可逆的な機能不全に陥るのを防がなければならない。このため、発症から再開通までの時間を短縮させ、迅速に適切な治療を提供しえる体制が重要となる。

当院脳卒中センターは三島医療圏救急患者を受け入れているが、年間を通じて 24 時間の受け入れ態勢を実行し、迅速な脳卒中治療開始を可能としている。当院脳卒中センターにて経験した急性期脳卒中症例 を提示するとともに、入院症例の全体像について報告する。